

卒業生の福川幸子さんから自叙伝 『流転』を送っていただきました。

福川さんは 1929 年生まれ。遺愛旧 54 回生として 1946 年 3 月に卒業されました。現在は横浜にお住まいで、12 月の遺愛同窓会東京支部クリスマス会には必ず出席されており、いつもお会いすると、にこやかな笑顔で挨拶をして下さいます。昨年(2019)の 2019 年度クリスマス会には残念ながら、体調を崩されてお会いできなかったのですが、今は回復され、自叙伝『流転』を執筆し、遺愛に送って下さいました。

『流転』には、ご両親の思い出、幼少期のこと、遺愛女学校時代(特に戦時中の援農)のこと、就職、同僚との交際、病理学者であるアメリカ人からの熱烈なプロポーズ、年老いたご両親と 15 歳・17 歳の 2 人娘さんと共に住んでいる男性とのご結婚、実のご両親の昇天などについて書かれていました。

福川さんの人柄を知るのにとっても参考になるのは、本の冒頭に長女の方が寄稿している文章です。紹介しますと…高度成長期のサラリーマンの家庭。明治生まれの祖父母と同居の思春期の娘 2 人は、父のパートナーを迎えることを、何より望んでいましたが、こんな難しい家庭に誰も来てくれる人はいないだろうと、あきらめておりました。しかし、奇跡は起きました。ダリアの花を飾った時のように、家の中がパッと明るくなりました。それ以来、私達は、昭和生まれの 37 歳の女性と明治生まれ女性の対峙する姿を凝視し続けていた生活でした。彼女の、己を以って凜とした態度で明るく振るまっている姿は、圧巻でした。強くもあり、又しなやかにも。自己を犠牲にし相手に合わせていくなど。真面目すぎるほど真面目なところは「鉄の女」を思わせました。…。

福川さんのこれまで人生は「真面目一路」でした。それが、援農の地でも、就職先でも、ご家族からも信頼され、愛される秘訣だったように感じます。



『流転』



遺愛女学校冬服



遺愛女学校夏服



ご家族に囲まれて

2020 年 9 月 17 日